

北陸の 医療の発展に 力を注ぐ



金沢大学附属病院長

吉崎 智一

金沢大学附属病院の歴史を 継ぐ

吉崎智一新病院長が、金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科教室の教授に就任したのは2008年。「人を育てることは、すなわち自分を育てることである」を掲げて教室を率いてきた。専門は頭頸部腫瘍。臨床では脳神経外科など各科と連携し、時には10時間以上に及ぶ手術を行ってきた。研究では、EBウイルスやパピローマウイルスが喉にがんを発生させる機序や、その新規治療法について取り組んでいる。直近では、千葉大学やシンガポールの南洋理工大学との共同研究により、上咽頭がんにおけるEBウイルスと宿主クロマチンの相互作用のメカニズムを明らかにし、2024年3月、学術誌『eBioMedicine』にオンライン掲載された。得られた知見は、将来、上咽頭がんにおける新たな治療法の確立に役立つことが期待されている。このように、金沢大学附属病院のブランド力創成のための一翼を担ってきた。

本年度からは「金沢大学附属病院」

という大きなチームを吉崎病院長が率いていく。就任の第一声は、蒲田前病院長が提唱した、職員が明るく元気に働ける職場づくりを受け継ぐことである。「はつらつと元気に働くことができてこそ、個々の能力を発揮することができ、特定機能病院の本領である高度、先進的、安全安心の医療を提供できる、そのように考えています」

金沢大学附属病院の特色については、このように認識している。

同院のルーツは、江戸時代末期の1862年に開設された加賀藩彦三種痘所。その後、石川県金沢病院、金沢医学専門学校附属医院など改称が繰り返され、1949年、金沢大学医学部附属病院となり、現在の名称に落ち着いたのは、2008年。1世紀半以上にわたり、数多くの医療人を世に送り出してきた伝統を有している。その歴史を反映し、同院の医師たちが自らの後継を育てるというシステムもできている。

「もう一つの大きな魅力は、本学医学系では先進的な研究が行われ、その成果を臨床に還元することを強く意識しているということでしょう

う。臨床医は大学院で研究に励み、博士の学位を取る、そういう素養を備えた人材が豊富にいます。また、医学生においては、単に医学の知識を身に付けるだけではなく、「こたえ」のないような疾患診療において、いかにして『こたえ』を見出すか、そのような不屈の心構えを身に付けさせる。これも本学医学類、本院の強みです」

能登半島地震の医療対応にも 尽力

ここ近年、日本は、人智が立ち向かうには苛酷な事象に遭遇している。2020年、COVID-19の猛威については、大学病院や基幹病院はその対応に追われながら、一方で、医療人は誹謗中傷に耐え、踏ん張った。第一波の、ウイルスの正体も治療法も全く見えない最も厳しい時期、石川県内で診断、治療、対策の重要な役割を担ったのが同院だ。新型コロナウイルス感染症が第5類となり、医療人が胸をなでおろした矢先、2024年1月1日、能登は震度7という大震災に襲われる。金

沢でも震度5強を観測。同院では被害状況を調べ、翌日には対策本部を立ち上げ、急性期患者の受入れ、関連病院へのスタッフ派遣などに奔走した。「このような想定していない事態に遭遇しますと、医療の提供に支障を来すものですが、本院は、高度医療の提供を維持しながら、能登半島地震の被災者に対する医療支援活動に力を尽くしました。県内にお

ける急性期病院の病床が逼迫するなか、本院では能登地域からの患者さんを受け入れるとともに、震災以外の急性期患者さんを多数、受け入れました。救急部を始めとする職員が、本当によくがんばってくれた。地震発生より4カ月を経まして、支援は中・長期的な支援に移行しています。このような経験を受けて、本院としては近い将来、より効果的な医療支

援システムの開発を考えていききたい」

金沢大学附属病院では今年3月、地上4階、地下1階建ての第2中央診療棟の全面供用を開始した。年間の手術数が増加を辿り、手術待ちの患者数も増えたため、手術室増設を目的に2022年3月に着工した。最新の医療機器を導入した手術室を増設、患者の受け入れ数を増やし、

身体への負担が少ない手術の提供を進めていく。手術室を6室新設し、院内で総計20室になる。

一番の目玉は、北陸3県初の導入であり、手術中に磁気共鳴画像装置（MRI）が撮影できる「術中MRI対応手術室」だ。「いまのところ、脳神経外科における覚醒下の腫瘍摘出手術がメインです。どの領域でこの手術システムを適用できるか、



データを積んで、演繹的に確かめながら、適用領域を広げていこうと考えています」

また、感染症が疑われる患者の治療用に、ほかの部屋とは完全に分離した手術室も設けた。2階には抗がん薬治療をする外来化学療法センターを中央診療棟から移動し、病床数を22床から38床に増やした。

「計画当時、感染症の患者さんに対応する手術が必要かどうか、かなり論議になりました。2020年のコロナ禍の前のことです。議論の末、結核患者さんなども少なくはないので、やはり、感染者対応の手術室を造るという決定になりました。結果、コロナ禍という全く思いもよらない事態に陥り、この手術室を設けたこ

とは正解でした。感染症に対策する手術室は、他院でもあると思います。が、当院では、院内を通さずに手術室へ患者さんを運べる設計になっています」

社会をどよめかしたい。 そして命を守りたい

吉崎病院長は高校時代、進路を模索していた時期、エンジニアか弁護士か、という候補が頭の中に在ったという。最終的には、理系分野で人と関わる仕事をしようと決め、医師を志す。「エンジニアになり、社会をあとと言わせるブレイクスルーを成せば、特許を取り、栄誉も財も得られる」と、工学系へ進んだ同期。「医

学も研究はできるし、その成果を社会が認め、臨床に還元するには年月を要するけれど、まずは目の前で病に苦しむ人を助けることができる。対価はあとからやってくる。そういう話をしたら、そいつからあまいなあ、と言われました」と軽妙に笑う。医療の真価を確信している笑みだ。

吉崎病院長自身の信条は、「之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」という論語の一文。「之〳〵何か」を成そうとするなら、それを楽しむことが一番、という意味だ。学を成そうとするなら、これを好む以上に楽しむことが最善という自身への教訓。教授になってからの座右の銘は、明治から昭和にかけて名を馳せた、政

治家であり医師でもある後藤新平氏の「財を遺すは下、事業を遺すは中、人を遺すは上なり」という有名な言葉。世の為に働ける医療人を育成したいという自身の思いを重ねた。「私なりの解釈を付け加えますと、されど、財なくんば事業保ち難く、事業なくんば人育ち難し。財力が無ければ事業もうまく回らないし、人材も育てられない、と。結局、まずは財力、そういうことか、って思います」(笑)

さらにもう一つ、海軍大将の山本五十六氏の名言も掲げる。「『やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ』は有名ですが、その続きをご存じでしょうか。『話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず』軍人のことばとは思えないほど、思いやりのある人材育成だと思いませんか」

病院長は、同院の先生方にこう期待を寄せる。確かなエビデンスに基づく診療能力を縦軸に、患者とのコミュニケーションを主とする人間力を横軸に、これらが比例して伸びることを期している。

「先生たちは医師としてたいへん優秀です。経験を積んで診療能力を高めていただければ、と思っています。ただそれだけでなく、プロとしてもっと成長するには、患者さんを理解する能力を身に付けることが必要なのでは、と。たとえば『ノンバーバルコミュニケーション』。言葉にしたいくても、うまく表現できないような気持ちだったり、身体の状態だったり、そういうことを、患者さんの表情やしぐさから読み取れるような能力を身に付けていただきたい、です」

2019年、厚生労働省は、再編統合を検討すべき公立・公的病院名を公表した。その数は看過できないようなものに達している。

「少子高齢化が進み、大学病院でさえも、淘汰という厳しい状況にさらされています。この逆境に立ち向い、高度な医療を安心安全に届けるという特定機能病院の役割だけでなく、人が集い、人が学び、人が育つ、大学病院本来の役割を教職員全員が『楽しんで』果たしてもらえように旗振り役を務めたい」吉崎智一病院長の挑戦が動き出す。



Profile

吉崎 智一 (よしざき ともかず)

金沢大学附属病院長

【略歴】

1986年 金沢大学医学部耳鼻咽喉科学教室
1994年 金沢大学医学部耳鼻咽喉科助手
1995年 ノースカロライナ州立大学チャペルヒル校
ポストドクトラルフェロー (～1997年)
(上咽頭癌転移機構とEBウイルスの研究)
1997年 金沢大学医学部耳鼻咽喉科講師
2006年 クイーンズランド医学研究所 (オーストラリア・
ブリスベン) visiting scientist (～同年12月)
(癌・ウイルス感染症に対するワクチン・免疫療
法に関する研究)
2008年 金沢大学大学院医学系研究科 感覚運動病態学
(耳鼻咽喉科・頭頸部外科) 教授
2014年～2024年 金沢大学附属病院副病院長
2024年～ 金沢大学附属病院長